

71
会報

郷音

発行所 公益財団法人 聴覚障害者教育福祉協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-43-11 福祉財団ビル5F
TEL 03-6907-2537
FAX 03-6907-2915
発行人 山東 昭子 編集人 櫻井 博
(題字 山東昭子会長)

第三十九回 聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会

お母さんをたたえる会

第三十九回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会は、平成二十九年一月二十三日（月）憲政記念館で開催されました。全国都道府県より推薦された七十二名のお母さん・お父さんが表彰されました。ご家族と共に来場して直接表彰を受けられたお母さん方は三十八名でした。

開会式では今年で十年連続してご臨席いただいた秋篠宮妃殿下からお言葉を賜りました。

天候にも恵まれ、式典の部・発表の部ともに予定通り滞りなく実施することができました。多くのボランティアの皆さんに支えられて、心温まる行事として終わることができました。有難うございました。



第39回
聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会
開会式

秋篠宮妃殿下のお言葉

「第三十九回聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」の開催にあたり、皆さまとお会いできましたことを大変うれしく思います。

本日は、最初に聴覚障害児を育てたお母さま方への表彰がございます。この表彰は、昭和五十三年に始まり、今日までに八千四百名以上の方々を受賞されました。今年も、全国から、お母さま方やご家族がここに集われています。

近年、聴覚障害をもつ子どもたちの生活環境が、大きく改善されてきました。しかし、そうした子どもたちが、言葉を学び、円滑なコミュニケーションをとることは、難しい面もあると伺っております。お子さまを育てられる過程では、不安や困難に直面され、はかりしれない努力をされたことでしょう。このようなかでも、皆さまが強い勇気と希望を持ちながらお子さまを立派に育てられましたことに、心から敬意を表します。

続いて、聴覚障害者で社会貢献の著しい方への表彰がございます。この度受賞されるのは、聴覚障害者として昨年五月、初めて世界最高峰のエベレスト登山に成功した登山家で、今までも幾つものことに挑戦し続けてきた方と伺っております。そのような彼の姿勢に、多くの人々が大きな勇気を得たことでしょう。

そして、「第十二回全国豊学校作文コンクール」の金賞受賞者の表彰がおこなわれます。聴覚障害をもつ児童・生徒にとって、ことばを身につけコミュニケーションの能力を高めることは、生活を豊かにする上で重要なことの一つだと思います。今年も小学生、中学生、高校生が自分の思いを言葉に載せて、数多くの素

晴らしい作文を寄せられました。

この度受賞される皆さまに、心からお祝い申し上げますとともに、今後の益々のご活躍を期待しております。聴覚障害に関わる分野で長年にわたり尽力された方々に感謝の意を表しますとともに、聴覚障害者に対する理解が一層深まり、皆さまが安心して豊かに暮らせる社会が築かれますことを願い、大会に寄せる言葉といたします。



お言葉を述べられる
秋篠宮妃殿下

祝 辞

文部科学副大臣 水落 敏栄

本日受賞されますお母様方に対し、心からお祝い申し上げます。また、お母様方がこれまでに様々な場面で直面されてきたであろう御苦労と、お子様に対する深い愛情と御献身に対しまして、心から敬意を表します。障害のある子供たちが、将来、自立し社会参加していくために、学校教育は重要な役割を担っています。学校教育において、障害のある子と障害のない子が共に学ぶことができる環境を作り、子供たちが持っている能力を可能な限り伸ばしていくことが重要です。

そのため、文部科学省では、一人一人の教育的ニーズに応じた教育を行うことができるよう、多様で柔軟な仕組みを整備していくことや、教職員の専門性の向上、教育環境の整備、障害のある子供に対する様々な

合理的配慮の一層の充実に精力的に取り組んでいるところ。また、来年度より新たに、就学前から学齢期、社会参加までの切れ目ない支援体制の整備や、通級による指導を担当する教員の配置を充実することについても実施していくこととしています。

御参会の皆様方におかれましては、こうした教育分野における取組について、今後とも格別の御理解と御支援を賜りますようお願いいたします。

結びに、この意義深い表彰事業を実施されておられます公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会の一層の御発展と、本日御参会の皆様方のますますの御健勝と御活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

厚生労働大臣 塩崎 恭久

本日表彰を受けられる方々に對し、心からお祝い申し上げます。特に、お母様方におかれては、お子さんの障害児支援サービスの利用、学校卒業後の進路選択など、お子さんの成長を支えるにあたり、喜びだけでなく、大変なご苦労もあったと思います。

この「たたえる会」を通じて、これからも、お母様方が、お子さんの成長に寄り添っていかれることを応援するとともに、聴覚障害のある方々の教育や福祉について、幅広く国民の理解が深まっていくことを期待しています。

現在、障害のあるお子さんへの支援としては、児童発達支援センター等において、日常生活における基本的動作の指導などの発達支援が行われています。

また、学校などを卒業した後、就労を希望する方に対しては、就労移行支援サービスでの訓練等により、可能な限り企業等での就労ができるように支援しています。

このほか、聴覚障害のある方への支援として、障害者総合支援法に基づく意思疎通支援事業等により、手話通訳者や要約筆記者といった、意思疎通をサポートする人材の派遣や養成を行っています。

厚生労働省といたしましては、今後とも、聴覚障

害のある方々への情報支援やコミュニケーション支援等について、関係する皆様のご意見を十分にお伺いしながら、施策の充実に向け、取り組んでいきたいと考えています。引き続き、ご理解とご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

結びに、この度表彰を受けられました皆様の今後の一層のご活躍と、山東昭子会長をはじめとする聴覚障害者教育福祉協会の皆様の方々の発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。

(代読) 厚生労働省障害保健福祉部長 堀江 裕

* お母さんの体験発表 *

子育てはみんなに支えられて

千葉県 伊東 典子

祐貴と聾学校の係りは、大阪の生野聾学校の乳幼からです。幼稚部の年長で、小学校は居住地の普通学級に行くか、聾学校の小学部どちらがいいのか考えました。祐貴は消極的な性格でしたので居住地の小学校ではただただ周りについていくだけの毎日になりそうなので、聾学校の小学部に上がることに決めました。

小学部になってもやはり祐貴の性格は変わりませんでした。幼稚部からの友達と楽しく過ごしていましたが、一年生の秋に夫の転勤で関東に戻ることになりました。聾学校は千葉聾学校に転校しました。当時、千葉聾学校の同級生はなんと6人。生野聾学校の半分よりも少ない人数でしたので、世界が狭くなったように感じ不安でした。どうやって我が子の



世界を広げようかと思いつきながらの通学でした。同級生のお友達はみな優しくしてくれて、放課後校庭で遊ぼうと誘われ行ってみると、陸上部の中学生と高校生が練習していました。生野聾学校は中学部までしかなかったもので、ここでは高校生を身近に見ることができ

ました。いずれは祐貴も高校生になることを思い描きながら走る姿を見ていました。

千葉聾学校での生活も一年半が過ぎた頃、学校のことをもっと知りたい、また先輩のお母さん方のお話も聞きたいと思い、PTA文化厚生部長になりました。PTA本部役員会にも参加し、校長先生や各学部の先生のお話と先輩のお母さん方のお話で学校の様子もわかってきました。当時のPTA会長より井戸端話の会をやりましょうと提案され、私が担当することになりました。生野聾学校も千葉聾学校もキュードスピーチでの教育でしたので、手話はあいさつ程度しかわかりませんでした。そこで聴覚に障害のあるお母さん方に講師として参加をお願いしました。事前にテーマを決め、単語を選んで打ち合わせをしました。講師のお母さん方の手話が速くて読み取れず、私はもう一度お願いとか、ここに書いてと紙を出したりして、普段とは反対の立場になりました。ゆっくり手話表現をしてみたい少しだけですが読み取れるようになりました。

一方、祐貴はドッジボールの練習が始まり、初めはボールが当たると泣いていたようですが、学年が上がるにつれてボールも取れるようになり、強いボールも投げられるようになりました。小学生のドッジボール大会で勝つことを目標に頑張っていました。大会に参加することは社会参加でもあるのでこちらにも真剣に応援しました。夫は大会で負けると帰りの車の中で試合に対しての気持ちの持ち方などをアドバイスするのですが、車内は暗い雰囲気です。聞いていいるうちに祐貴は疲れて寝てしまいました。先生方はなんとかして子どもたちを大会で勝たせてやりたいと、先生の指示が見えるよう工夫をしてくださったり、大会前の朝練でもたくさん先生方が子どもたちと一緒に汗を流してくださいました。また、中学部や高等部の先輩たちも参加し手伝ってくれました。勝つためには、チームの仲間を思いやり、助け合い、気持ちを一つにすることを学びました。六年生になった時にはドッジボールが楽しく好きなスポーツになっていました。

千葉聾学校の中だけで過ごすことからもう少し世界を広げたいと思い、大塚クラブ主催の北海道サマーキャンプに行かせました。キャンプは二週間だった

ので夏休みの宿題はできるだけ進めておき、聾学校の勉強を疎かにしないよう話しました。親から離れ、普段とは違う仲間とすごして帰宅した時にはちよつとだけ遅くなったように感じました。

中学部になり野球部に入部しました。健聴の次男も少年野球を始めました。二人とも野球のことは全くわからずに入りましたので、プレーは見られたものではありませんでした。

三年生になると中学部の部員が10人になったので初めて千葉市の中総体に参加しました。結果は惨憺たるものでしたが、健聴の中学生と同じ土俵で戦えた経験は親としてもうれしかったです。また、関東聾学校中学部野球大会では決勝まで進み、葛飾ろう学校と対戦し負けました。その時の葛飾ろうのピッチャーとはのちに大学で一緒になりました。

顧問の先生から子どもが中高生になったらお父さんの出番ですよと言われ、野球好きな夫は土日の練習試合を観戦しました。夜、家では祐貴を呼び、その日の試合の配球やプレーについて語っていました。夫は自分たちはテレビで野球を見て解説をきいて野球に詳しくなり面白さもわかったけど、祐貴たちはそれがあまりできないからと言っていました。

中学部のキャプテン、高等部でも最後はキャプテンをやりました。監督からはキャプテンとしての役割やエースとして技術だけでなく気持ちの面でも指導していただきました。また、生徒会長もやっていたので必然的にみんなの前で自分の考えを話したり、みんなの意見をまとめることが増えて、そうしたことに慣れていきました。

高等部から入った寄宿舎では異年齢の仲間や先生方と一緒に生活したことで教室では得られない係りがたくさんもてました。寄宿舎の先生方も常に子どもたちの様子を見ながら私たちにも適切なアドバイスをしてくださり、親の気持ちもどれだけ救われたかはかり知れません。

そうした祐貴の様子を見ながら私はPTA活動を続けていました。いろいろなことができる前会長さんたちが卒業したため、私は会長を引き受けることになりました。ある先生からPTA会長は自分の子のことをだけ考えるのではなく、子どもたちみんなのことを考えるのが大事な役目ですよとアドバイスを

をいただきました。実際に活動してみると引き継いだことをやっていくのがやっとでした。

2年目になり千葉県特別支援学校PTA連合会の理事が輪番できました。近くにある県立袖ヶ浦特別支援学校に伺い、理事や役員会に参加しました。障害の種別は違いますが、お互いの理解を深め子どもたちのために頑張っている他校のPTAのみなさんに会い、視野も広がりました。

聾学校の中ではPTA会員の皆さんの力になれず迷惑をかけたこともたくさんあったかと思いますが、手話の会で講師を引き受けてくれたお母さん方や長年に渡り一緒にPTA活動をしてくれた保護者の皆さんに支えられてなんとか3年間務めることができました。

PTA活動は大変だからと敬遠されがちですが、やってみると先生方の苦労がわかったり、自分が勉強不足であることがわかったり、他校のPTA活動の素晴らしさも学べたり、自分たちの活動の良さもわかったりしました。我が子だけでなく子どもたちみんなが笑顔になり、聴こえなくてもできることをたくさん増やしてあげたいと思いがらみんなで活動した時間は充実したものでした。

祐貴は高等部卒業後の進路は良き先生方に出会えたことで将来は先生になりたいと淑徳大学に入学しました。野球部の先輩が通っていたので、先輩が声をかけてくれて手話サークルにも入りやすかったようです。

サークル活動以外にも東京で行われるわくわくデフスポーツのスタッフや全日本ろう学生集い、東京みみカレッジ、ろう者の草野球にも参加し活動しています。消極的な子がここまで活動的になれたのは先生方のきめ細やかな指導と今まで出会ったたくさんの方々との係りがあったからだと確信しています。子育ての大きな山は越えましたが、子どもたちの幸せを願い応援しながら過ごしていきたいと思っています。

●第三十九回聴覚障害児を育てた

お母さんをたたえる会受賞者

【北海道】矢野早苗、堀江加代、菅井忍、田尾喜一、

山本優江

【青森】山越信子、森山初代、富嶋友子、助川笑子

【秋田】加賀谷祥子

【茨城】新堀廣子、加藤陽子

【栃木】飯島ケイ子

【群馬】岩崎真弓、吉野寿美子、関矢紀子、原澤久代、奥泉和子、石関典子

【埼玉】穂積春美、岡田史子

【千葉】能代谷てい子、鶴岡敦子、伊東典子、高木淳子、幸田こずゑ

【東京】淡川澄江、岩波睦子、住田恵美、田村花子、小高由美、天野理香、葛西明子、毛塚初江

【神奈川】菅恵子、重住和子

【新潟】中村一美、仲村恵

【山梨】藤巻直子

【石川】土田早百合、高田広美、朝倉茂美

【富山】浅井弘子

【長野】北原きよ子、洞澤睦子、井出久美子、滝澤五十鈴、鶴見洋子、北田文子

【岐阜】遠山ひとみ、日焼順子

【静岡】宮本恵奈美、杉永三千子、藤森美ゆき、玉井清子

【愛知】石曾根涼子、篠田紀、穴井美千代、石田佐和子、坂本さなえ

【京都】中村友加里

【大阪】小林美代子、太田まゆみ

【兵庫】大西直美、辻田八栄

【岡山】落合千代子

【徳島】小原美佐子、瀬戸孝恵、馬詰美幸

【高知】中野るみ

【佐賀】椎山つた枝

【鹿児島】澤田花子

●全国聾学校作文コンクール審査講評

審査委員長 齋藤 佐和

全国聾学校作文コンクールは本年度、第十二回目となりました。本日、秋篠宮妃殿下の御臨席を賜り、表彰式ならびに入賞作品の発表が行われますことは、入賞者にとりまして、本コンクールに取りまして、誠に光栄なことであり、深く感謝申し上げます。本年度は、四十二校から百九十編が集まり、二次審査に進んだ四十編の中から入賞、努力賞、佳作が決定しました。小学部は日記作品を含み応募作品は

昨年度より増えましたが、中学部はやや減少、高等部はほぼ同数でした。本コンクールのテーマは「自然や人とのつながりの中で自分に焦点をあてたもの」で、毎年、作品を通して聾学校に通う子どもたちの関心の在りかとそれを表現する力の成長を辿っていくことができ、審査委員としても大きな喜びです。

小学部低学年の日記作品七編には日記らしいものも作文に近いものもありましたが、いずれも子ども達が書くことを覚えていく頃の姿が見えて、心から応援したくなるものでした。作文の七十一編は、学校生活や交流などでの経験について書いたものが多数でしたが、事実を正しく書く段階から様子や気持ちや意見も書けるようになっていく発達を見ることができました。その中で、テレビで得た情報をさらに調べて、得られた知識と自分の思いを調和をもつて書いた佐藤美華さんの「マララさんからのメッセージ」は特に高い評価を受け、文部科学大臣賞を受賞することになりました。中学部では、障害やコミュニケーションに関する思い、趣味や貴重な体験等、題材は多様化してきましたが、いずれも体験の中で自分がどのように感じ、考えてきたかに重点が置かれるようになっています。日頃感じていることをまとめる力も出てきます。吉村桜さんの「手紙を送ろう」は、メールとは違う手紙のもつ良さ、使われる言葉の重みを自分の経験を振り返りながら書いたもので、内容や構成も優れていて聾学校校長会会長賞を受賞しました。

高等部では、障害に関わる葛藤あるいは生命や家族の老いや死について考える作品が多く、また熊本聾学校からは震災を巡る厳しい体験と想いをまとめた作品も寄せられました。家族に関わる作品にも高校生らしい視点が加わってきます。聴覚障害教育福祉協会会長賞を受けた濱田この実さんの「家族」のカタチは、やがて自立していく日を思いつつ、家族としてかけがえのない今を書き残そうとしており、家族の意味を改めて感じさ

せる優れた作品でした。

本コンクールでは二次審査に進んだ作品を作品集に掲載し、また応募全作品の分析結果を小冊子にまとめて全国聾学校に還元しています。書くことに苦手意識をもつ子どももいる中で、同じ環境で育つ仲間の作品を読むことで子ども達の書く意欲を促し、新たな作品の誕生へと繋がっていくことを期待しています。また聾学校の作文指導では、題材について教師との対話を深めて、適切な表現を見出したり推敲したりすることを大切にしています。分析結果のまとめが指導の参考として活用されることを願っています。これからも聾学校の子どもの自由な表現の場となるよう、また日本語の力を育てる聴覚障害教育の専門性継承に貢献できるよう、本コンクールは引き続き役目を果たしていきたいと思っています。ありがとうございます。

全国聾学校作文コンクール文部科学大臣賞受賞作品発表



作文コンクール
金賞受賞者3名

マララさんからのメッセージ

山形県立山形聾学校

小学部六年 佐藤 美華

小学部五年生のとき、わたしはテレビで、マララ・ユスフザイという女の人のスピーチを偶然見た。明るく、自信にあふれた様子を見て、わたしは、マララさんって、いったいどんな人なのか、もっと知り

たいと思った。お母さんは、「世界で一番若くてノーベル平和賞をもらった人だよ。」と教えてくれた。わたしは、さっそく学校の図書館に行つて、マララさんについての本を探して読んでみた。

マララさんは、パキスタンという国で生まれた。そこでは、男の子が生まれると盛大にお祝いをしてもらえるけれど、女の子なら、家系図にものせてもらえず、親戚からお祝いもないそう。

わたしは三姉妹だ。だから、家系図には父と祖父しかのらないことになる。自分がいるのに無視されたようで、とてもさびしい気持ちに達しない。

わたしが、もし、日本でなく、マララさんの国に生まれたらどうなっていただろう。目をつぶって想像してみた。

わたしは女の子で、さらに耳に障がいがある。きつと外にも出してもらえず、今のように聾学校にも通わせてもらえないだろう。そして、とてもみじめな気持ちで毎日生活しているだろう。

その国には補聴器はあるだろうか。もし、あっても補聴器というものがあることを教えてもらえないかもしれない。わたし達のように、障がいのある人達は、どんな気持ちで毎日を生活しているのかと考えたら、背中あたりに、どんな寒くなってくるようだった。マララさんは、「学校に行きたい、そして男子と同じように勉強したい。」と言っただけで、バスの中で大切な顔をうたれた。当たり前のことを言っただけで、ひどい目にあつてマララさんは、どんなに怖くて悔しかっただろう。

しかし、そこからマララさんのすごいところだ。そこで絶対にあきらめないで、声をあげた。だから、その声に、みんなが耳を貸して、少しずつ世界が変わることにつながったのだと思う。

一方で、わたしはどうだろうか。話が通じないときに、あきらめないで、少しでも分かってもらえるまで話しかける努力をしただろうか。交流学习での出来事を思い出していても、まったく努力していない自分しかいなかった。

わたしは、マララさんのように、世界を変えるような力は、残念だけれどまだない。

しかし、せめて、わたしは自分の話を理解してもらえらるうように、あきらめずに伝える努力をしていこう。それがマララさんからのわたしへのメッセージのように思えたから。

● 桜内義雄賞受賞者

「母を語る」

東京都 登山家 田村 聡

念願のエベレスト登頂に成功しました。どんな時でも諦めず、挑戦し続け、三度目にして、三十六年越しの夢が叶いました。桜内義雄賞をいただくことは、大変光栄です。ありがとうございます。

自然の多い東京都立川市に生まれ育ちました。生まれてしばらくすると、叔父が私に話しかけても反応がなかったため、耳が聞こえないことに気がきました。両親が近くの病院や大病院など多くの病院に行き、耳が聞こえるようになる治療を探しましたが、ありませんでした。

先生の紹介で近くにある、都立立川ろう学校に行きました。幼稚園の時から毎日、母と一緒に通いました。私はとても人見知り、引込み思案な泣き虫でした。授業中に私がキョロキョロしていると、授業終了後、母から注意をされました。私は、毎日のように泣いていた事を覚えています。負けるのが嫌いで、しつこくに厳しい、凛とした母です。両親からは生活面でのマナーもしつかりと教わりました。幼稚園から高校生まで、立川ろう学校でたくさんのお友達と学びました。仲の良い友達以外の人は、なかなか馴染めず、そのうえ、耳が聞こえないため、コミュニケーションには苦労しました。



十三歳の時、登山の趣味を持つ父、叔父と山に連れて行っても

らい、自然の素晴らしさを知りました。父は、自由にそして安全にいろんな山を経験して欲しいと願っています。

両親は、いつも私が山に出発すると心配していますので、無事に帰れることを常に心掛けています。登山の他にも自然の中のスポーツであるアルペンスキーやオフロードバイク等も、やっていました。一つ一つ目標を持ち、挑戦をしたことで、世界一過酷なパリダカールラリー参加や雪国育ちではない私がアルペンスキーでデフリンピックにも選ばれました。どんなに苦しい時でも、好きだから今まで続けてこられました。これからもそうです。

いろいろな壁が立ちちはだかりますが、状況を考慮し、勇気を持って、挑戦すれば道が開けます。エベレスト登頂から、八ヶ月になりました。エベレストアタック時には、酸素不足や片目しか見えない状態になっても、常に自分のスタイルを保ち、登頂成功したことに、胸をなで下ろしました。人生は一度きり。次の目標をもって、チャレンジを続けます。生まれ育った緑豊かな立川、私を育ててくれた立川ろう学校、そして、私を支えて頂いた、たくさんの方々に感謝申し上げます。

年度当初の会長ご挨拶



聴覚障害者教育福祉協会会長
参議院議員 山東 昭子

新しい年度となりましたので、ひとことご挨拶申し上げます。

本協会が昭和六年に財団法人聾教育振興会として創立して以来、八十六年の歳月が流れました。益々の事業の充実を目指して努力してまいりますので、皆様のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

さて、昨年度の第三十九回「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」は、平成二十九年一月二十三日(月)に実施いたしました。今回も公務が多忙な中を、秋篠宮妃殿下のご臨席並びにお言葉を賜りました。誠に光栄に思いますとともに、深く感謝いたしますとさせていただきます。

全国の聾学校・聴覚特別支援学校の教育の充実発展を願って実施しております全国聾学校絵画展、全国聾学校作文コンクール、全国聾学校合奏コンクールは、例年とほぼ同様に実施し、それぞれ立派な成績を上げることができました。

児童生徒の基礎的な言語力の基盤づくりにつながる、「読字力検定」試験への挑戦も、各校において続いています。

これらの事業のほか、公益財団法人JKA競輪共益資金の補助事業であるFM補聴システムの無償貸与事業、移動母子教室開設事業も滞りなく実施することができました。

このように昨年度も、協会の各事業の実施と運営に、皆様方のご理解とご協力を賜りました。誠に有難うございました。今年度の各事業実施につきましても、皆様方の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

全国聾学校合奏コンクール

● 審査結果

金賞・文部科学大臣賞

・大阪府立生野聴覚支援学校 小学部 二十四名
「子どもの世界」

楽器編成(キーボード、ウインドチャイム、木琴、バスマスター、アコーディオン、グロッケン、大太鼓、タンブリン、鍵盤ハーモニカ、リコーダー)

銀賞

・東京都立大塚ろう学校 小学部 十五名

「バイレーツ・オブ・カリビアン メドレー」

銅賞

・福島県立聾学校会津分校 小学部 二名

「ラデツキ行進曲」

努力賞

・青森県立八戸聾学校 中学部 五名

「リベルタンゴ」

・東京都立大塚ろう学校 小学部 十七名

「生命の息吹」

・香川県立聾学校 中学部 九名

「かぜまち」

・筑波大学附属聴覚別支援学校 小学部 十名

「狼なんかこわくない」

・筑波大学附属聴覚別支援学校 小学部 十三名

「星に願いを」

審査員奨励賞

・愛知県立二宮聾学校 中学部四名・高等部五名

「浪漫飛行」

・愛知県立二宮聾学校 高等部八名

「LIVE/EVIL」[EYE]メドレー

・鹿児島県立鹿児島聾学校 中学部三名

「プリンク・プランク・プランク」

●全国聾学校合奏コンクール第二次審査総評

審査委員 草間 みどり

一次審査から二次審査へ、今年は例年にないほど飛躍的なレベルアップ(進歩、進化)が図られていました。音楽的なニュアンスを出すことについては、二十年間を見ても、隔世の感があります。この変化には驚いています。

今年度の合奏コンクールでは、二つのことが印象に残りました。

一 音の表情、音色が感じられるようになり、フレーズの作り方が丁寧になってきました。例えばリタルダンドの作り方なども、全員で気持ちを合わせ演奏が揃い、曲趣をつましく表現していました。音色を見事に使い分けているので、音楽が豊かに

なっています。様々な楽器を使い、組み合わせ方を工夫した音色の変化がきわだっていました。

一方、マリンバ二台のみで演奏した福島県立聾学校会津分校小学部二名のラデツキ行進曲は、フレーズをよく考えた音が澄んで美しい音楽になっていました。

二 一人一人の演奏レベルが一次審査から二次審査で飛躍的に高くなりました。先生方のご努力とご苦労が感じられました。

オーケストラの団員がお互いの音を聞きながら演奏するのと同じように、子供たちは相手の音を心で聴きながら演奏しています。子供たちの限らない可能性がこういうところにあるのだと知らされました。これは、子供たちを教える先生方の大ききだと思えます。

出版された譜面そのままの学校は一つもありません。一人一人に合わせたパートを作り上げる工夫をされています。教育の原点だと感じさせられました。

また、このコンクールに応募できると言うのは、人的な条件が整っていると言うことです。演奏を指導する先生だけではなく、撮影するスタッフ、フアナライズなど視聴覚機器に長けた先生の協力、また練習時間や雰囲気をもりあげるための担任の先生、学部や学校全体の協力があったからこそ、音楽コンクールへの参加が可能になると考えられます。

今後合奏コンクールが、子供たち一人一人に信じ自信を持たせ、情緒豊かになるよう導く教育に寄与できるよう願っています。

どの学校もあと少しで受賞となる演奏をしています。メロディを共有し、お互いの音を確かめつつ、リズム、フレーズの中で縦線を整え、音の表情やフレーズを豊かにした丁寧な演奏をしていくと、さらに良い合奏になります。

ぜひ、来年度に向けての努力を絶やさず、次回の聾学校合奏コンクールに臨んでください。期待しています。

●全国聾学校合奏コンクール表彰式

第二十八回全国聾学校合奏コンクール表彰式は、平成二十九年二月七日受賞校の大阪府立生野聴覚支援学校で行われました。山東昭子会長、田中一嘉審

査委員長のご出席のもとに表彰が終わると、小学部児童二十四名が優勝曲である「子どもの世界」を演奏してくれました。この日も元氣溢れる立派な演奏でした。来年の演奏が今から楽しみです。



合奏コンクール表彰式
大阪府立生野聴覚支援学校

ハマナス募金

当協会では実施しております事業は、公益財団法人JKA競輪公益資金の補助をはじめとして、皆様方からのご寄附(ハマナス募金)により実施しています。皆様方のご理解とご支援に深く感謝いたしております。

今年度も計画事業の適正な実施に努めているところでございますが、昨今の社会情勢から事業資金の確保が大変厳しい状況にあります。つきましては、皆様方より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。次年度でございます。

ハマナス募金のお振込みは、郵便振替、又は銀行振込にてお願いいたします。

郵便振替口座 00110-9-134877

名義 聴覚障害者教育福祉協会

銀行振込 みずほ銀行江戸川橋支店
普通口座 1615748

名義 公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会
会長 山東昭子

当協会は、平成二十四年四月六日内閣府（内閣府大臣より税額控除に係る証明を受理しております）

平成二十八年十一月一日から平成二十九年三月末までの間に、次の皆様方よりご寄附をお寄せいただきました。誠に有難うございました。

(敬称略)

金子昌夫、折山精、春名英徳、群馬県立聾学校群馬県聴覚障害者親の会、北村正彦、岡部忠信、阿部きみよ、堀信子、武田千枝子、大筋久夫、川村美津子、古橋靖男、草薙進郎、浦川絢子、伊与久美子、六車郁子、丸茂明子、成田久江、井上富美子、平野美佐子、青森県ことばと心を育む会中村久美子、大塚明敏、高田愛子、山形県立聾学校校長高橋節子、青野雅子、野口敦子、安達スミ子、藤本登、弘田文範、一般社団法人日本補聴器販売店協会、新谷正義、日高清子、坂井美恵子、小林明、新谷正義、田中美郷、小川昭子、リオン株式会社、小澤配邦、小島藤昭、石川庄六、斎藤捷彦、チャリティ・アソシエーション、石油連盟、牧島ミリ、全国親の会事務局長安田喜一、筑波技術大学学長大越教夫、仲田邦男、福島県ことばを育む会（株）テアトルアカデミー（浅井健二）、入澤肇、宮代律子、筑波大学附属聾学校卒業生親の会鴻友会

平成二十八年年度

公益財団法人 JKA競輪公益資金による

補助事業実施計画

一、事業名

平成二十八年年度障害のある人が幸せに暮らせる社会を創る活動補助事業

二、事業実施内容

(一) FM補聴システム（リオン株式会社製）の購入・無償貸与

送信機・受信機三十セット

全国聾学校・聴覚特別支援学校、小学校、中学校、難聴幼児通園施設に在籍、在園する幼児・児童・生徒の家庭に貸与

(二) 移動母子教室の開催（全国五地区）

第一回移動母子教室（十月十七日）

鹿児島県鹿児島市

「子育てで大切にしたいこと」

第二回移動母子教室（十月二十五日）

群馬県前橋市

「年齢に合わせた子どもとの関わり方」

第三回移動母子教室（十一月三日）

石川県金沢市

「自転車で日本を縦断して」

第四回移動母子教室（十一月九日）

千葉県千葉市

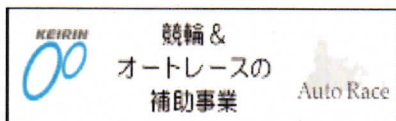
「豊かな心を育て、ことばを育てる」

「聾学校における授業を考える」

第五回移動母子教室（平成二十九年一月七日）

東京都杉並区

「ろうの看護師として これまでと今、そしてこれから」



トピックス

平成二十八年年度

聴覚障害教育振興奨励賞受賞校

事務局長 井口 昭

去る三月一日、平成二十八年年度の受賞校二校が聴覚障害教育振興奨励会（会長 渡邊研）から発表された。

① 東京都立大塚ろう学校

校長 横倉 久
教諭 江川麻貴
教諭 海保和代

研究テーマ

聴覚に障害のある乳幼児及び保護者への相談・支援の取組

② 静岡県立静岡聴覚特別支援学校

校長 古木庄吉
教諭 池上元子

研究テーマ

聴覚障害児の早期発見、早期療育のための医療と保健福祉と教育との連携

【概説】

本振興奨励賞は聴覚障害児の教育（聴覚特別支援学校、聾学校等）の充実・発展・振興に資する研究・実践を行った団体または個人を表彰する事業で公益財団法人聴覚障害者教育福祉協会を通じて、（株）日健総本社から助成を受けている事業である。

聴覚や言語に遅れや障害があるかないかの発見は早期ほどその後の教育や療育の成果に大きな影響を及ぼすことは自明の理である。

学校教育の立場から見れば、三歳から幼児教育、義務教育、高等教育と制度的には整備されているが、重要な出生週辺期から乳幼児期は医療、福祉、教育と専門分野にわかれており、管轄はそれぞれ医療・福祉は厚生労働省、教育は文部科学省となっている。聴覚・言語に遅れや障害のある人間を円満な人間

に育てるには、乳幼児期の対応は医療、福祉、学校教育等が融和して総合的に育てていかなければならない。すなわち、各関係機関の専門性の連携が欠かせないのである。連携の必要性は古くから言われているが、現状は充実している分野もあるが、人間教育の立場を中心とする分野の実践・研究は緒に就いたばかりと言えよう。

乳幼児期の教育が法的にも制度的にも確立されることによってわが国の聴覚障害者の教育制度が完成すると言っても過言ではない。

平成二十八年度の聴覚障害教育の奨励校はこの観点に立った実践報告である。

聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会の創設

常務理事 小林 明

響き前号(第七十号)に、私は「聴覚障害乳幼児教育相談の制度化に向けて」と題して寄稿した。

その中で、全国聾学校校長会が昨年度集約した全国聾学校で行われている乳幼児教育相談実態調査結果をもとに法制度化に焦点化した関係機関への要請行動の必要に言及した。しかし、全国の聾学校でそれぞれに情熱をもって取り組まれている教育活動であつても研究試行的に恣意的に展開されている実情をそのままに、単に人や物の不足を訴えるだけでは要請に当たつての説得力不足は否めないと思われた。

まずは、指導理念も含めて聴覚障害乳幼児教育相談の在り方を研究集約する必要があるというところで、諸般の事情から本協会の事業として標記研究委員会の創設を本年六月の理事会・評議員会に提起することとした。

目的としては、①聴覚障害乳幼児並びに保護者を対象とした望ましい教育相談の在り方について研究

し、乳幼児段階の教育要領、指導指針の明確化を図る。
②聴覚障害乳幼児教育相談の道標として、また制度化要請資料としての研究誌を刊行する。

研究主題は、「聴覚障害乳幼児の教育相談指導の在り方」と設定する。

研究組織としては、研究計画の立案ならびにその方向性、理論的裏付け、指導助言、調査研究委員会報告の検証等を担う「研究企画委員会」並びに実践、実態調査を踏まえて、発達段階に応じた指導内容、方法、配慮事項等の在り方にかかわる研究提起を担う「調査研究委員会」の二本立てで構成することとしている。

研究企画委員会委員は、本協会理事、評議員に就任されている方々の中から学識経験者八名の先生方にご協力ご指導をいただく予定である。

調査研究委員会委員は、現在教育相談をされている先生方で校長先生に推薦をうけた有志の先生方八名に委嘱協力していただく予定である。旅費の関係で都内および近隣の学校から選任せざるを得ず、それを補う意味で全国八地区各一名の地方委員もお願いし、必要に応じてメールによるご協力を仰ぐ予定である。

なお、二名体制の協会事務局は、本事業に対応する余裕がなく、別途研究会事務局を構成し、本事業に関わる事務処理、必要経費(寄付金)の確保については研究会事務局で担当することとしたいと考えている。

一応研究期間は二年間を目途として平成三十年度末までにまとめを刊行することを期して精力的に取り組む、保護者他の関係者で新たに構成する聴覚障害乳幼児教育相談の法制度化実現期成同盟の取り組みに結びつける所存である。大方のご理解ご支援を賜れば幸いである。

編集後記

会報「響き」七十一号をお届けします。今号は四月末の発行となりますので、平成二十八年度後半の事業についての記事が中心となっています。

「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」は第三十九回となりました。当協会の事業としての目標は、百名のお母さん方を表彰することです。最近ではお母さま方の推薦人数が目値を下回ることが多いので、是非多くのお母さん方のご推薦をいただけるようお願い申し上げます。

なかなか実施要項どおりにはいかないのが常なのですが、昨年度は絵画展、合奏コンクールともに山東会長が受賞校である筑波大学附属聴覚特別支援学校と大阪府立生野聴覚支援学校に直接赴き、文部科学大臣賞を授与することができました。合奏コンクールの表彰式では、審査委員長の田中一嘉先生も表彰式にご出席いただき、講評していただきました。有難うございました。

平成二十九年度の協会事業は、「聴覚障害児を育てたお母さんをたたえる会」をはじめとして「読字力検定試験」、「絵画展」、「作文コンクール」、「合奏コンクール」等、例年通り実施する予定です。全国の聾学校、関係機関、関係団体等のご理解ご協力、ご支援を賜りますよう、事務局一同、心よりお願い申し上げます。

また、当協会の事業運営の支えでありますハマナス募金にもご協力いただけますようお願い申し上げます。